

市民リポーター
工藤 織枝さん



●くどう おりえ
カルルス町在住。23歳。
家業のカルルス温泉・山静館に勤務。趣味を生かし、スキーのインストラクターとして愛好者の指導にあたる。(社)登別青年会議所のメンバーとして、社会活動に参加。



▲1本スキー（アルペン競技）

◀シットスキー（クロスカントリー競技）



▲昨年、日高町で行われた第22回全道ハンディキャップスキー大会

体のハンディを乗り越え 見つけた生きがい

第23回全道ハンディキャップスキー大会
2月22日(金)～24日(日)開催

雄大な大自然に恵まれた私たちが住む登別。道内でも温暖で降雪量が少ないためか、みなさんには、『冬』のイメージが少ないかもしれません。

しかし、近くにはカルルス温泉サンライバスキー場があり、子どもからお年寄りまでのたくさんの方が冬のスポーツを楽しんでいます。

そのカルルス温泉サンライバスキー場で、今月の22日(金)から3日間、体にハンディキャップをもつ方たちのスキー大会が行われます。登別では初めて行われるこのハンディキャップスキー大会についてレポートしました。



市民リポートは、市民のみならず、市民のみなさんが自由に発想・企画するページです。

登別の雄大な大自然の中で ハンディキャップスキー大会

ハンディキャップスキー大会は、体に障害をもつ方がハンディキャップを乗り越え、スキーを通して社会活動に参加していくことを目的に、昭和55年から行われています。記念すべき第1回は、北海道ハンディキャップスキー協会主催のもと、砂川市で行われ、各地から参加したスキーヤーがその優れた技術を競いました。以後、同大会は回を重ねるごとに参加者が増え、今では全国有数のハンディキャップスキー

大会に成長しました。

今月の22日には、市内の『カルルス温泉サンライバスキー場』を会場に、23回目の大会が行われます。大会は、毎年その会場を変え、ここ登別で行われるのは今回が初めてです。

今回、なぜ私がこのスキー大会をリポートしようと思ったか。それは、私も以前に足のじん帯を断裂し、自由な体を動かすことのできないつらさを経験したからです。今では日常生活に支障はありませんが、スキー競技をしてきた私にとっては大きなダメージです。しかし、私よりも大きなハンディキ

ャップを背負った方がのびのびとスキーを楽しんでいることを知り、一種の感動を覚えました。参加する方の障害の程度や部位はさまざまですが、共通していえることはどなたも自分の障害を重大なハンディだとは考えず、スキーを楽しんでいることです。今回の大会では、私も登別スキー連盟の一員として、大会運営のお手伝いをする予定です。同大会実行委員会競技役員の佐藤さんにお話をお聞きしました。

万全の準備で選手のみなさんをお迎えします

「この大きな公認大会を開催できることは、私たちの連盟が高く評価されている証です」と話すのは、大会の事前準備を進めている登別スキー連盟副理事長の佐藤勝明さん（58歳）。

「アルペン競技は、いくつもの大会を運営しましたが、クロスカントリー競技の公認大会を運営するのは初めてなんです。また、サンライバスキー場内にコースを設置できないため、陸上